

日本におけるビリヤードの普及・発展に関する一考察
A Study on the Spread and Development of Billiard in Japan

1K09B100-4 澤畑亮太

主査 友添秀則先生 副査 深見英一郎先生

【目的】

本研究は、ビリヤードの発祥と世界的伝播、及び日本におけるビリヤードの現状、特に日本にビリヤードがどのように伝播・発展し、現在どのような問題を抱えているのかについての検討を踏まえ、ビリヤードの普及・発展に対する提案を行うことを目的とした。

【第1章】

第1章では、ビリヤードの発祥と伝播について検討した。ビリヤードには、様々な起源説があるが、その中でもクロスが変形したものがビリヤードに結びついたという説が有力であった。クロスの変形によりマーイという遊戯が生まれ、マーイの簡易版としてビリヤール（ビリヤード）が誕生し、15世紀頃から遊ばれるようになった。当初のビリヤールは、地面で遊ばれる遊戯であったが、16世紀の頃から室内遊戯として広がり、現代のビリヤードへと発展、伝播していくことになる。世界的に伝播していったビリヤードは、競技場所、用具、ゲームの種類、ルールなどが時代によって変化し現代のビリヤードに結びつくことになるが、ビリヤードが正式なスポーツ競技としての基盤をつくるきっかけになったのは、1928年の世界ビリヤード連盟（U.M.B）の結成である。世界ビリヤード連盟（U.M.B）結成後は、多くの世界大会の開催やテレビ放送、様々な協会の加盟による組織の巨大化など、ビリヤードの世界的発展に影響を与える。

【第2章】

第2章では、日本におけるビリヤードの歴史と現状について検討した。日本におけるビリヤードの歴史は、18世紀中頃、長崎出雲のオランダ商館にビリヤードが伝来したという記録が最も古いものであった。オランダより伝わったビリヤードは、日本の中で広がっていき、ボウクラインゲームやスリークッションゲームを取り入れ発展していくが、昭和18（1943）年頃には戦争の影響を受け、ビリヤードを行うことが困難な状況になる。戦後、ビリヤードは復活していくことになる。日本のビリヤードの復活・発展の経緯の中で重要な役割を担ったのは、大正14（1925）年の日本撞球協会の設立である。日本撞球協会の設立

は、スポーツ競技としてのビリヤードを確立していくための第一歩となった。日本撞球協会は、昭和26（1951）年に日本ビリヤード協会となり、現代では社団法人日本ビリヤード協会として日本のビリヤード協会の中心的存在になっている。また、日本ビリヤード協会は、様々な協会の加盟による組織の拡大に成功し、現在ではビリヤードに関する多くの活動を行っていることがわかった。さらに、日本におけるビリヤードの現状を参加人口、年代別参加率、男女別参加率、地域別参加率などの項目別にまとめた。

【第3章】

第3章では、日本におけるビリヤードの今後の発展に向けて、競技力の維持、生涯スポーツとしてのビリヤードの可能性、教育としてのビリヤードの可能性という観点から提案を行った。日本のビリヤードの競技力は高く、世界でもトップレベルである。そのため、競技力の維持という課題が挙げられるが、競技力を維持していくためには、若年層の強化、指導者の養成が不可欠であるということがわかった。若年層の強化、指導者の育成を行うことで、日本のビリヤード全体の強化育成を組織的に行なっていくことができ、それが今後のビリヤードの発展と普及に繋がると結論付けた。また、日本におけるビリヤードは生涯スポーツとしての面も持っているということを述べた。ビリヤードは、老若男女を問わず行えるスポーツであり、生涯者などに与える健康的な影響もある。このことから、総合型地域スポーツクラブで行われることが望ましいとし、現状を維持し、さらに活動を広げていくことが課題になると考えた。さらに、ビリヤードには教育としての可能性もあるということを述べた。ビリヤードは、運動の楽しさや喜びを教えてくれるのと同時に、子どもたちを心身共に成長させていくための手助けをしてくれるスポーツである。このようなビリヤードを、教材として工夫しながら学校体育に取り入れることにより、競技スポーツとしての、そして生涯スポーツとしてのビリヤードをさらに発展させることにも繋がるため、学校体育にビリヤードを取り入れることを提言した。